

豊明希望チャペル礼拝

2022/8/7

ヤコブの手紙 1 : 13~18

「この父が、生んで下さった」

前回の 12 節までは、キリスト者の、貧しさと富む事について教えられました。身分の低い人は、高くされ、富むことは過ぎさると。

今日は、罪の事、クリスチャンに訪れる誘惑と試練の問題を考えていきたいと思います。

みなさんは、シンドラーのリストという映画をご存じでしょうか。古い映画ですが、TVでも再放送されたりしているので、見た方が多いのではないのでしょうか。

この映画に出てくる主人公の、オスカー・シンドラーは、命の危険にさらされていたユダヤ人を、次々と自分の会社に雇い入れることで、彼らの命を救ったのです。そこには、確かに死をも恐れない彼の勇気がありました。

それで・・・みなさんは、その後のシンドラーについて聞いた事があるでしょうか？実は、彼は、戦後、妻を捨て、女性関係におぼれ、酒におぼれ、ついに身を持ち崩したのです。ユダヤ人達を救って、命を助けられた、彼らがシンドラーにお礼の気持ちを表すために送ったのは、何もない財産の中から、彼らの金歯だった。その金歯で彼は金の指輪を作り、それを売って遊んだというのです。

聞かなければ良かったというようなエピソードですね。戦時中のヒーローが、戦後は、見るも無惨な姿を露呈したというのです。

それで、みなさんにあえてお聞きしますが、みなさんは、このギャップに驚きを感じるのでしょうか？

ある人が、誘惑に免疫はないと言いました。自分はずいぶん色んな、人間の罪を見てきた、遊び、体験もしてきた、だから免疫が出来ているから、もう誘惑されない、ダメされないというのでしょうか・・・そういう人はいないという事です。

毎日毎日が新しい試練との戦いであり、誘惑との戦いであるということです。昨日、あのシンドラーであった人が、今日もそのシンドラーであることは出来ないということです。

今日の箇所は、クリスチャンに訪れる、誘惑と試練の問題についてヤコブは触れています。彼ヤコブが、ほんとうに罪のリアリティー、罪の現実の中に生きている、その罪を良く知っている、おそらく彼自身が深くそこで生きている、そのことを感じさせられるところです。

そもそもこのヤコブ書というのは、乱暴な言い方で言えば、彼は、信仰などというきれい事で自分自身をごまかしてはならない、そのような美辞麗句によって隠されたあなた自身の現実はどうなっているのか、クリスチャンといっても、行いを伴っていないではないか、あなたは実は徹底的に罪人なのだと言うことを強調するのです。ヤコブ書はリアリズムの書だと思います。もっとも、聖書は、すべて信仰

のリアリティーによって貫かれています。

しかし、それだけに、罪が実にリアリティーのある問題であるように、救いも、キリストが十字架について下さるというリアリティーに保証された、リアリティーのある、確かな救いである事を思うのです。そんな確信を確認しつつも、罪に敗れる人間の現実の姿を確認していきます。

さて、まず 13 節をお読みしたいのですが、ここは、前回の 12 節に続く箇所ですので、12 節から続けて読みます。

「1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いた人は、神を愛する者たちに約束された、いのちの冠を受けるからです。1:13 だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言ってははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません。」

二つのキーワードでこの話を整理しなければなりません。それは、試練と誘惑です。実は、この二つの言葉、ギリシャ語においては、名詞と動詞という品詞の違いこそあれ、同じ言葉なのです。

しかし、少なくとも、ヤコブは、この二つを明らかに区別しているのがわかります。ヤコブは、たしかに、12 節に試練と、この 13 節の誘惑をあえて並べて、この二つを混同しないようにと述べているからです。

みなさんは、試練と誘惑というのは区別できると思います。ある人が、試練とは外から来るもので、誘惑は内からくるものだと言いましたが、ヤコブは、もっと明確にこの二つを区別しています。

わかりやすく言うと、試練は神からくるもの、誘惑は、悪魔から、あるいは、自分自身(の内側)からくるものという区別です(日本語では幸い、区別出来ます…)。

試練は、たとえば人を成長させる一つの訓練であって、スポーツで言えば練習？あるいは負けるが勝ちというような時に使う、あれは勉強になったというような＋に生かされる経験であります。しかし、誘惑という場合は、それは罪と関連が深いことばで、それは人を罪にみちびく力であります。ですから、12 節にあるように、試練の場合は、神に愛された者が命の冠を受ける一つの(確実な)過程であるけれど、誘惑の場合は、罪に導く過程だというわけです。

ですから誘惑は、神様とは関係のないものです。13 節の終わりに「ですから、誘惑とは、神ではなくて悪魔がすることです。」と付け加えたらわかりやすいと思います。正確に読むと、「悪魔の力によって」とはいわず、誘惑があなたにやってきてあなたは、それを選んでいって行っているようです。それに負けている。そこには、それは、あなたの責任であって、神に対するあなたの責任だと言っているのです。

この書全体を通して教えられることですが、彼は良く知っているのです。信仰者の弱さをです。信仰者だと言っても、罪を犯す、罪を犯しただけでなく、時々、自分自身の人生に対して、言い訳をする。人間には、そういう弱さがある。アダムはエバがすすめたからだと言ひ、エバは、蛇が誘惑したからだと言ひます。それは究極には、神よ、私が罪を犯すのは、もとはといえば、あなたが私を創造されたか

らです。こんなに弱く。だから神の責任ではないか、だから少なくとも、神は、多少の事では神は目をつむってくださるのではないか。そう思いたい。私はやりたくなかったのだけれど、抗しがたい罪の力で仕方なく・・・そう言いたいのではないかと。そういう弱さがあるのです。

パウロも言いました。ローマ人への手紙「7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。7:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」

もちろん、ヤコブもその事を良く知っています。そして、ヤコブの知っていたのは、その福音でさえ、私たちの弱さになるし、誘惑になりうるという現実なのです。罪の深さなのです。

クリスチャンであるすべての者が、今朝、知らなければならないこと、それは、私たちが、徹底的に罪人である。そのことです。

そして、それは、誰のせいでもなく、私自身の責任なのだと言うことを理解しなければならないと言うことなのです。14 節を見て下さい。

「1:14 人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。」

三版では、「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。」とあります。

トゥルナイゼンは、聖書のみならず、すべての書で、これ以上完璧な、人間が罪に落ちていく行程を説明したものは他に無いだろうと言いました。

Ⅲ「1:14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。1:15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」

どういう意味かという、自分の中から生じた欲、それがまるで人格をもったもののよう、私を誘惑し、罪におびき寄せるといいます。そして、それが、ついに「はらむ」妊娠させるということです。そうなったらとめることが出来ない、胎児は内側で成長するばかり、あとは、外に出るだけ、確実に、その罪は、十月十日で人の目にさらされる。罪は、心の内で成長し、それはおもてに現れ、罪の結果の裁きを身に受けるということです。

2017 年版の「引かれ」ということばは、釣りの用語だそうです。フィッシング(釣る)ですね。

釣り人は、魚がどのように考えるか、想像します。そしておびき寄せるのです。すぐれた釣り人は、魚の習性を熟知しています。ところが、どのような精巧なエサを作っても、食いついてこないときがあります。人間と似ています。罪を犯しやすい人間でも、罪を犯す事に疲れるときがあります。眠りたい、休みたい。しかし、釣り人はあきらめません。そのようなときには、目立つ色のエサを使い、それに、なるべく重い重りをつけて、魚の目の前まで沈めるのです。魚は、ちょっと口に含んでみてはき出すのです。しかし、私は、即座に竿をあげるのです。私のように？すぐれた釣り人から逃れられる魚はありません。

悪魔もそうです。その誘惑は、人間の知恵をはるかに上回っている。ヤコブは、こう言います。16 節。

3 版では、ずばり「1:16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。」と訳します。悪魔は巧妙に人をだますのです。これに対峙し対抗するにはどうしたらいいでしょうか。17 節と 18 節を見て下さい。

「1:17・・・すべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来る」と言います。

彼は、天の父を見上げるようにと言うのです。この 2 節に、実に 3 回、父ということばが出てきます。そして、そこから来る素晴らしい恵みに、私たちの目を向けさせようとするのです。

私たちが罪の力に勝つ方法、誘惑に負けない方法、それがあるとするなら、ここから教えられることは、誘惑に向かいあってそこで戦うよりも、それ以上に、キリスト者に約束されている、神の圧倒的に豊かな恵み、祝福にこそ目を向けるということです。神の愛、神がどんなに貴方を大切に思い、どんなに多くの賜物を与えようとして用意していて下さるか。その事を徹底して知ることだということです。

ヤコブは、もっともすぐれたもの、時代がどんなに変わろうとも変わらない価値、神と神の国の圧倒的な価値、その素晴らしさに心打たれ、心ひかれることこそ重要だということです。

18 節の「被造物の初穂」という言い方。初穂というのは、最初に取れた、もっとも良い物という意味です。そこでヤコブが言いたいのは、あなたがたは、被造物の中でもっとも良い物として、新しく生まれた神の子どもである。この世のつまらない価値に心ひかれるのは馬鹿馬鹿しい、そういう名誉ある存在だということです。

さて、本日、ヤコブは、神の摂理の中で何もかも起きるのだからと、依存的になって責任を取ろうとしない傾向をもつ信仰者に対して、罪はあなたの責任だと、ある意味で、罪に向かいあうべき事を、私たちに促しました。ただ、そんな私たちが、罪に勝つもっともすぐれた方法は、明確であり、簡単な真理です。それは、貴方の罪を十字架で担い、赦し、ついに天国の素晴らしい宝を得させようとされたキリストに目を向けること、あなたの罪にも勝利してくださるキリストに目を向けること。その福音にこそ生きるようにと勧めているという事です。

さて、この重要な真理を今朝、私たちは、あらためて知りました。

今週、私たちは、この世の誘惑に満ちた世界の真ん中に遣わされていきます。そこから逃れることがすぐれた方法の一つと教えられたのですが、逃れられない現実とも向かいあわねばならないかもしれません。しかし、その時にいつも思い起こしたいのです。私たちは、いずれ天において、もっと確かに手にするだろう、その恵みに比べれば、目の前にある誘惑が、どんなに小さく、つまらない物であるかということです。神が貴方を愛されている。父が子供を思うように貴方を慕い、あなたにもっともすぐれた宝を与えたいといつも考えておられる神がおられる。その恵みをこそ、いつも思い起こしたいのです。

今週も、まっすぐ上を見上げながら歩む歩みでありましょう。